

光る泥団子を作ろう！！

■プログラムの概要

ねらい	泥と触れ合って、自然に親しむ		
キーワード	身近な自然		
対象	幼児		
時間	70分	実施場所	園庭
使用するもの	<ul style="list-style-type: none">・土（園庭花壇の土）、砂（砂場の砂）、水・ビニール袋・ザル（乾いた土をふるっておくため）・タライ		
全体の流れ	<ol style="list-style-type: none">1. 導入 泥や土についての話2. 泥に触れてみる3. 泥団子作りの説明4. 泥団子作り5. まとめ		

■進め方

時間	学習内容	指導上の留意点
5分	<あいさつ>	
10分	<p><導入></p> <ul style="list-style-type: none"> 泥や土についての話 <p>土は何に変身するのか？どんなことができるのか？仲良しになる前に知ってみよう！</p> <p>(陶器になる・野菜などの植物を育てる・地面をあたためたり、冷やしたりするなど)</p>	<ul style="list-style-type: none"> 実際に植木鉢の中で育っている植物や畑の野菜など見せながら話をする。 園庭で話をする際、子どもたちがまぶしくない場所を選ぶ。
10分	<p><泥に触れてみる></p> <p>タライに土・砂・水を入れみんなで混ぜ、感触を楽しむ</p>	<ul style="list-style-type: none"> 泥を作るところから子どもたちと一緒にいき、泥の感触を十分に楽しめるようにする。 土2・砂1くらいの割合で、硬さは手で握って固まるくらいにする。
10分	<泥団子作りの説明>	<ul style="list-style-type: none"> しっかり泥の感触を楽しんでから、子どもたちにわかりやすい言葉で、例をあげながら話をする。
30分	<p><泥団子作り></p> <ol style="list-style-type: none"> ①上につくった泥は両手で丸められるくらいの量を取り、お団子にする ②両手できりがしながら握り固めていく ③水分がでてきて、水がたれなくなるまで握り固めていく。 ④乾いた土を泥団子にまんべんなくかけ余分な土を落としさらに握り固めていく。→なめらかになるまで繰り返し行う ⑤表面が乾いてきたら親指の腹でこする <p>※さらに光らせたい時は乾燥させてザルでふるった細かい土や、園庭の表面の細かい土をつけて布などでこする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 大人も一緒に作り楽しむことで、やり方を目で見える形で伝えたり、楽しさを知らせたりしていく。 泥団子が大きすぎると握る際、力が入りにくいため、あまり大きくしないほうがよい。 ④で使う土は花壇の土のみ使用。砂は混ぜない。あらかじめ乾かしてサラサラの状態にしておく。 泥団子はビニール袋に入れて保管する。プログラム後や次の日にさらに光らせるために、※の作業を行うことも可能。
5分	<p><まとめ></p> <ul style="list-style-type: none"> 泥団子を見せ合う <p>出来上がった泥団子をみんなで見せ合い、感想を伝えあう。</p> <p>・みんなで最後のあいさつをして終了</p>	<ul style="list-style-type: none"> 他の子が作った泥団子を見たり、自分の泥団子を見せたりする。子どもたちの気づきを大切にしつつ、感想を伝えあえるようにする。 見せ合う際、色々な賞を作って、コンテスト形式にするのも楽しい

■使用するもの

物 品 名	数 量	備 考
タライ		6人にひとつくらいが目安。 (泥んこ用と乾いた土用を分ける)
ビニール袋	1人1枚	泥団子の保管用
土ふるい用のザル	1つ	さらに光らせる際に使用する

■実施にあたって留意する点

- 泥団子は、その場所の土、水の量、まぜかた、気温や天候などによって出来上がりの時間や状態が変わってくるため、指導する人が事前に一度、作ってみることが必要。
- 冬の時期は泥が冷たいので不向き。初夏～初秋はそのまま泥んこ遊びを行うことも可。
- 場所などによっては、放射線量の測定が必要になることもある。
- 園庭の土に腐葉土を混ぜているところは、土がうまく固まらず団子にならない可能性がある。
- 途中で失敗（割れてしまった）場合の対応を考えておくとよい。
(例：予備の団子を作っておく。粘土を溶いたものを接着剤として、割れた団子を接着させてオブジェにするなど)